

研究ノート

# 「授業アンケート」からみた流通経済大学

関 宏幸

## 1. はじめに

我が国では急速な少子高齢化を迎え、大学入学者数は、18歳人口の減少と進学率の増加による緩衝状態が続いたが、2018年度からは再び減少に転じと予想されている。いわゆる「2018年問題」である。また、社会経済のグローバル化が急速に進み、大学間の国境を越えた協働と競争が活発になっており、大学の質保証には、国内だけでなく、諸外国の動向を踏まえた国際的な視野からの検討も不可欠となっている。このように、大学を取りまく環境がさまざまな点で大きく変わってきている。

中央教育審議会大学分科会では、2006年以降、学士課程教育に重点を置いた審議を行ってきた。その問題意識の骨子は次のようなことであり、我が国社会の将来の発展のため、学士課程教育の構築が喫緊の課題であるという認識に立っている。

ア. グローバルな知識基盤社会、学習社会を迎える中、我が国の学士課程教育は、未来の社会を支え、よりよいものとする「21世紀型市民」を

幅広く育成するという公共的な使命を果たし、社会からの信頼に応えていく必要があること。

- イ. 高等教育そのもののグローバル化が進む中、明確な「学習成果」を重視する国際的な流れを踏まえつつ、我が国の「学士」の水準の維持・向上、そのための教育の中身の充実を図っていく必要があること。
- ウ. 我が国に顕著な少子化、人口減少の趨勢の中、学士課程の「入口」では、いわゆる「大学全入」時代を迎え、教育の質を保証するシステムの再構築が迫られる一方、「出口」では、経済社会からイノベーションや人材の生産性向上に寄与することが強く要請されていること。
- エ. 政策的には、大学間の競争の促進によって教育活動の活性化が図られてきたが、教育の質の維持・向上を図る観点からは、大学間の「協同」が併せて必要となってきたこと。

また、2007年7月には文部科学省から「大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について」が公布され、2008年4月から施行されることとなった。その第23条の3（教育内容等の改善のための組織的な研修等）が改正前の「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。」から、「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」に改正され、大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施が、努力目標から大学の義務となった。

本学においても、大学を取りまく教育・研究環境の変化に対応するべく、さまざまな対応策を検討・実施してきたが、今後さらなる施策を検討する必要が求められている。

その施策の一環として、本学では2001年度以来、2004年度を除き毎年「授業アンケート」調査を実施している。この間、本学では法学部とス

ポーツ健康科学部の新学部の開設、入試制度の改革（AO入試の導入等）、キャンパス選択制の導入などが行われ、さらに時代・社会の激変により学生にも大きな変化がみられる。このような状況の中で、学生の個々の授業に関する意向を調査によつて的確に把握し、より学生のニーズにあった授業内容や授業の進め方に反映させることを目標として実施されてきた。

筆者は、流通経済大学のFD委員として2010年度より2014年度まで年度末に開催される全学FD研修会において、本学の「授業アンケート」の報告を行ってきた。本報告では、その際発表した内容をまとめたものである。

## 2. 「授業アンケート」について

### 2. 1. 実施概要

アンケート調査は、調査票の各項目のマークシート欄に回答させる方法で、授業単位、無記名で行っている。2008年度までは、年1回秋学期のみを対象とし、2009年度以降は、年2回で春・秋の学期末に実施している。アンケート実施期間は2010年度までは実質1週間程度、2011年度以降からは3週間程度にわたってアンケート期間を設定している。これは、少しでもアンケートの回収率を向上させるためである。調査対象の授業としては、原則として全授業科目とし、講義、語学、演習（ゼミ）、スポーツ関連、コンピュータ関連、また教養、教職科目については講義科目とは別途集計できるようにしている。なお、受講者が10名以下の授業については、調査の実施については担当教員の判断に委ねている。調査実施は、授業開始後ないし終了前の15分間程度である。詳細を表1に示す。

表 1：授業アンケート実施期間

年度	学期	アンケート期間	学期	アンケート期間
2008	-	-	秋学期	2008年11/17(月)～11/22(土)
2009	春学期	2009年6/22(月)～6/27(土)	秋学期	2009年11/30(月)～12/5(土)
2010	春学期	2010年6/22(火)～6/28(月)	秋学期	2010年11/29(月)～12/4(土)
2011	春学期	2011年7/4(月)～7/23(土)	秋学期	2011年12/12(月)～2012年1/16(土)
2012	春学期	2012年6/25(月)～7/14(土)	秋学期	2012年12/10(月)～2013年1/12(土)
2013	春学期	2013年7/8(月)～7/20(土)	秋学期	2014年1/6(月)～1/20(月)
2014	春学期	2014年7/7(月)～7/19(土)	秋学期	2015年1/5(月)～1/19(月)

## 2. 2. 調査項目と集計・分析の方法

アンケートの回答にはマークシート用紙を使用し、キャンパス名、科目名（および時間割コード）および担当教員名（および担当教員コード）、時間割曜日、時限が事前に印刷されている。また、学生は、学科、学年、日本人学生／留学生の情報をマークさせる。

質問項目は、年度により質問数および内容に多少の相違がある。2008秋、2009春、2009秋、2010春、2010秋は、質問数17であり、Q1からQ16は、5選択肢からの1選択、最後のQ17のみ6選択肢より最大3選択の複数選択となっている（表2参照）。

2011春、2011秋、2012春、2012秋、2013春、2013秋は、同じく前年度までと同じ質問数17（表3参照）であるが、「(表2) Q2.受講して授業の目標を達成した」を「(表3) Q13.学習達成度はどのくらいの位置」とし、学習達成度を意識させ、選択肢により授業内での相対的な達成度を答える項目に修正した。また、「(表3) Q7.内容・要点・気づきを記録した」「(表3) Q15.教師に近い場所に座わった」「(表3) Q10.いつも学習に集中

していた」など、受講学生の学習態度に言及した質問項目を新設した。さらに、「(表3) Q2.知識・技能・能力が身についた」といった学習成果の視覚化・明瞭化を示す項目も加えた。「(表3) Q11.課題・実習・実技を取り組んだ」などのアクティブ・ラーニングに関する項目、「(表3) Q8.授業後に教師に面談をよくした」などの本学の特色の一つである「少人数教育」を意識した項目も新設した。

2014春は、「(表4) Q18.シラバスの目標を達成できた」「(表4) Q19.全科目の1日平均学習時間」の2項目を新設し、質問数を19とした(表4参照)。

2014秋は、「(表5) Q20.シラバス通りに授業が進められた」の1項目を新設し、質問数を20とした(表5参照)。

表2：授業アンケートの質問内容  
(2008秋, 2009春, 2009秋, 2010春, 2010秋)

質問項目	選択肢数	選択数
Q1.シラバスを読み目標がわかった	5	1
Q2.受講して授業の目標を達成した	5	1
Q3.授業に興味を持ち学習したい	5	1
Q4.この授業を受講して満足した	5	1
Q5.話し方は明瞭で聞き取りやすい	5	1
Q6.教員の説明はわかりやすい	5	1
Q7.私語、携帯電話が気になる	5	1
Q8.遅刻、中途退席が気になる	5	1
Q9.学生の理解度を確認して進めた	5	1
Q10.授業の開始が遅い、終了が早い	5	1
Q11.内容と分量はちょうどよい	5	1
Q12.マイクなどの設備は十分である	5	1
Q13.この授業の欠席回数	5	1
Q14.この授業の予習回数	5	1
Q15.この授業の質問回数	5	1
Q16.不明な点を自分で調べた回数	5	1
Q17.受講理由(複数回答あり)	6	最大3

表3：授業アンケートの質問項目  
(2011春, 2011秋, 2012春, 2012秋, 2013春, 2013秋)

質問項目	選択肢数	選択数
Q1.シラバスを読み目標がわかった	5	1
Q2.知識・技能・能力が身についた	5	1
Q3.興味をもち学習してみたい	5	1
Q4.全体として学習に満足した	5	1
Q5.話し方は明瞭で聞き取りやすい	5	1
Q6.画像図説により理解が進んだ	5	1
Q7.内容・要点・気づきを記録した	5	1
Q8.授業後に教師に面談をよくした	5	1
Q9.理解度を確認しながら進めた	5	1
Q10.いつも学習に集中していた	5	1
Q11.課題・実習・実技を取り組んだ	5	1
Q12.授業の受講を他の学生に勧める	5	1
Q13.学習達成度はどのくらいの位置	5	1
Q14.1週間の自習時間はどのくらい	5	1
Q15.教師に近い場所に座った	5	1
Q16.この授業を何回欠席したか	5	1
Q17.受講理由(複数回答あり)	6	最大3

網掛けは、表2の質問項目から変わった項目

表4：授業アンケートの質問項目(2014春)

質問項目	選択肢数	選択数
Q1.シラバスを読み目標がわかった	5	1
Q2.知識・技能・能力が身についた	5	1
Q3.興味をもち学習してみたい	5	1
Q4.全体として学習に満足した	5	1
Q5.話し方は明瞭で聞き取りやすい	5	1
Q6.画像図説により理解が進んだ	5	1
Q7.内容・要点・気づきを記録した	5	1
Q8.授業後に教師に面談をよくした	5	1
Q9.理解度を確認しながら進めた	5	1
Q10.いつも学習に集中していた	5	1
Q11.課題・実習・実技を取り組んだ	5	1
Q12.授業の受講を他の学生に勧める	5	1
Q13.学習達成度はどのくらいの位置	5	1
Q14.1週間の自習時間はどのくらい	5	1
Q15.教師に近い場所に座った	5	1
Q16.この授業を何回欠席したか	5	1
Q17.受講理由(複数回答あり)	6	最大3
Q18.シラバスの目標を達成できた	5	1
Q19.全科目の1日平均学習時間	5	1

※網掛けは、表3の質問項目から変わった項目

表5：授業アンケートの質問項目（2014秋）

質問項目	選択肢数	選択数
Q1.シラバスを読み目標がわかった	5	1
Q2.知識・技能・能力が身についた	5	1
Q3.興味をもち学習してみたい	5	1
Q4.授業内容に満足した	5	1
Q5.話し方は明瞭で聞き取りやすい	5	1
Q6.画像図説により理解が進んだ	5	1
Q7.内容・要点・気づきを記録した	5	1
Q8.授業後に教師に面談をよくした	5	1
Q9.理解度を確認しながら進めた	5	1
Q10.いつも学習に集中していた	5	1
Q11.課題・実習・実技に取り組んだ	5	1
Q12.授業の受講を他の学生に勧める	5	1
Q13.学習達成度はどのくらいの位置	5	1
Q14.1週間の自習時間はどのくらい	5	1
Q15.教師に近い場所に座った	5	1
Q16.この授業を何回欠席したか	5	1
Q17.受講理由（複数回答あり）	6	最大3
Q18.シラバスの目標を達成できた	5	1
Q19.全科目の1日平均学習時間	5	1
Q20.シラバス通りに授業が進められた	5	1

※網掛けは、表4の質問項目から変わった項目

### 3. 授業アンケート結果

#### 3. 1. 授業アンケートの回収率

授業アンケートの回収率を表6および表7に示す。

表6より、「履修者の延べ人数」は、2012春の60,775人をピークに2014年秋には、51,158人まで16%弱落ち込んでいる。2012年度在学者数5,682人から、2014年度の在学者数5,400人への減少率5%が主たる原因であると考えられる。回収率は、秋学期より春学期が5%程度高く、秋学期で2008秋56.0%から2014秋57.9%と1.9%の向上、春学期では2009春60.1%から2014春63.9%で、3.8%の向上が見られた。回収率は、概ね授業の出席率

と連動していると考えられる。学期末に6割程度の出席率は決して高いとはいえない。表7の科目種別に回収率を見てみると、演習（ゼミ）、語学、コンピュータ、スポーツなどの必修科目が多く含まれる科目が概ね7割以上の回収率となっている。一方、教養、教職は回収率が5割を割り込む場

表6：授業アンケートの回収率（全学、専任・非常勤別、学部別）

履修者の延べ人数	回収数	全学		専任・非常勤別		学部別				
				専任教員	非常勤教員	経済学部	社会学部	流通情報学部	法学部	スポーツ健康科学部
回収率										
2008	秋	53,842	30,140	17,841	12,299	9,426	6,812	4,049	4,836	5,017
		56.0%		55.5%	56.7%	52.8%	59.4%	64.2%	46.2%	64.8%
2009	春	54,431	32,731	20,099	12,632	10,857	7,817	4,258	4,831	4,968
		60.1%		59.3%	61.6%	56.3%	67.0%	65.3%	51.3%	65.7%
	秋	52,525	28,990	17,350	11,640	9,559	6,916	3,951	4,091	4,473
		55.2%		54.1%	56.9%	52.1%	61.0%	45.8%	61.2%	59.4%
2010	春	55,646	32,525	19,942	12,583	10,805	8,501	4,522	4,393	4,304
		58.4%		58.1%	59.0%	54.7%	62.5%	65.5%	53.4%	60.1%
	秋	53,892	29,073	17,316	11,757	9,217	7,152	4,063	4,255	4,386
		53.9%		52.2%	56.8%	50.5%	58.9%	59.7%	44.6%	61.4%
2011	春	59,455	36,492	23,131	13,361	12,192	9,039	5,183	5,157	4,621
		61.4%		60.4%	63.2%	57.5%	66.7%	68.7%	52.7%	66.9%
	秋	56,342	30,836	14,535	16,301	19,271	11,565	10,166	7,616	4,398
		54.7%		57.1%	52.8%	53.4%	57.1%	50.8%	58.4%	60.6%
2012	春	60,775	36,724	17,205	19,519	22,368	14,356	11,852	9,491	5,076
		60.4%		61.3%	59.7%	59.6%	61.8%	57.5%	63.9%	69.6%
	秋	57,013	30,797	14,371	16,426	18,558	12,239	9,736	7,965	4,214
		54.0%		56.1%	52.3%	52.9%	55.8%	51.0%	57.1%	61.2%
2013	春	58,898	36,478	16,025	20,453	22,612	13,866	11,690	9,638	5,208
		61.9%		61.5%	62.3%	60.6%	64.2%	59.1%	64.8%	68.8%
	秋	57,919	31,548	14,248	17,300	19,145	12,403	9,840	8,294	4,226
		57.4%		58.5%	56.6%	56.0%	59.9%	52.7%	60.0%	64.2%
2014	春	53,919	34,432	15,804	29,621	22,262	12,170	11,111	9,467	4,230
		63.9%		65.0%	62.9%	63.4%	64.7%	60.0%	67.0%	70.9%
	秋	51,158	29,603	13,699	15,904	18,997	10,606	9,197	8,472	3,576
		57.9%		59.3%	56.7%	57.6%	58.3%	52.9%	62.4%	62.0%



合もあり、回収率を出席率と捉えると、これらの科目は、学期末まで履修生のモチベーションが持たずに、欠席による自主的な履修放棄になっていると推察される。余談になるが、2015年度から始まった全学の出席管理の結果から、この推察の根拠が得られると考えられる。

表7：授業アンケートの回収率（科目種別）

		科目種別							
		講義	語学	演習（ゼミ）		スポーツ	コンピュータ	教養	教職
				1, 2年生	3, 4年生				
2008	秋	14,048	4,751	3,446		949	1,267	4,589	1,090
		55.8%	62.0%	70.4%		61.5%	61.6%	42.1%	68.3%
2009	春	14,603	5,212	3,469		746	1,491	5,915	1,295
		59.8%	67.2%	72.1%		68.3%	71.3%	48.6%	62.0%
2009	秋	12,955	5,107	3,272		1,061	1,279	4,475	841
		55.1%	63.0%	68.3%		57.2%	62.4%	42.3%	51.9%
2010	春	13,597	5,493	3,443		859	1,609	5,973	1,552
		58.1%	65.0%	71.8%		59.1%	69.6%	47.3%	59.9%
2010	秋	12,233	5,368	3,313		808	1,361	5,155	835
		53.3%	63.5%	71.6%		61.4%	62.5%	40.1%	55.4%
2011	春	15,624	6,209	3,620		806	1,594	7,072	1,567
		61.3%	68.9%	73.6%		63.6%	71.0%	51.0%	59.1%
2011	秋	13,754	5,754	3,481		764	1,432	4,909	742
		55.5%	62.1%	72.8%		59.4%	62.5%	40.0%	45.0%
2012	春	15,280	6,213	2,155	1,465	924	1,612	7,262	1,813
		59.3%	69.8%	76.4%	75.6%	70.1%	73.8%	49.4%	57.7%
2012	秋	13,239	5,776	2,058	1,508	952	1,462	5,014	788
		52.0%	64.8%	75.3%	72.6%	63.5%	67.8%	40.1%	46.9%
2013	春	14,958	6,258	2,030	1,517	800	1,523	7,509	1,883
		60.9%	71.4%	75.5%	73.9%	72.1%	73.9%	52.4%	56.3%
2013	秋	13,035	5,907	1,759	1,467	810	1,214	6,402	954
		56.5%	67.1%	72.1%	72.6%	65.6%	66.5%	46.6%	54.0%
2014	春	13,881	6,035	1,887	1,571	780	1,265	7,420	1,593
		61.7%	73.3%	78.5%	74.2%	72.4%	74.9%	55.0%	66.1%
2014	秋	11,724	5,573	1,798	1,550	800	1,037	6,163	958
		65.9%	68.2%	75.7%	76.0%	66.9%	67.4%	48.4%	55.2%

### 3. 2. 2008秋, 2009春, 2009秋, 2010春の集計結果

#### 3. 2. 1. 4項目の集計結果

2008秋, 2009春, 2009秋, 2010春の4期のアンケート結果を用いて, 「Q1.シラバスを読み目標がわかった」, 「Q2.受講して授業の目標を達成した」, 「Q3.授業に興味を持ち学習したい」, 「Q4.この授業を受講して満足した」の4項目について, クロス集計を行った結果を表8から表10に示す。

表8 : Q2 × Q1 クロス集計 (2008秋, 2009春, 2009秋, 2010春)

		「Q2.受講して授業の目標を達成した」						
		肯定	弱い肯定	中立	弱い否定	否定	総計	
「Q1.シラバスを読み目標がわかった」	日本人学生	肯定	17,710	7,066	2,977	382	527	28,662
			18.29%	7.30%	3.08%	0.39%	0.54%	29.61%
		弱い肯定	2,399	16,659	9,712	1,162	364	30,296
			2.48%	17.21%	10.03%	1.20%	0.38%	31.29%
		中立	867	5,236	20,956	2,364	1,070	30,493
			0.90%	5.41%	21.65%	2.44%	1.11%	31.50%
	弱い否定	73	356	1,139	1,279	564	3,411	
		0.08%	0.37%	1.18%	1.32%	0.58%	3.52%	
	否定	158	180	577	423	2,608	3,946	
		0.16%	0.19%	0.60%	0.44%	2.69%	4.08%	
	計	21,207	29,497	35,361	5,610	5,133	96,808	
		21.91%	30.47%	36.53%	5.79%	5.30%	100.00%	

表8より, 日本人学生の「Q2.受講して授業の目標を達成した」×「Q1.シラバスを読み目標がわかった」の肯定-肯定をみると45.28%, 否定-否定は, 5.03%であり, 中立-中立は21.65%である。このことから, 71.96%の学生は, 授業目標の理解が授業目標の達成感へつなげていくことが確かめられた。一方, Q1が肯定または中立で, Q2が否定は, 19.17%いる。このことは, 履修学生の5人に1人は, 目標は理解できたが, 達成できな

かったと自己評価していることが明らかとなった。学生の理解度の把握や教員の講義技術の向上により、解消できる可能性があると考えられる。また、Q1が否定または中立で、Q2が肯定となっていると回答した学生が、8.87%いた。これは、目標は理解できなかったが達成はできた学生がいることを示している。これは、単位習得が容易な科目の存在を示唆しているものと考えられる。

表9：Q2×Q3クロス集計（2008秋，2009春，2009秋，2010春）

		「Q2.受講して授業の目標を達成した」						
		肯定	弱い肯定	中立	弱い否定	否定	総計	
「Q3.授業に興味を持ち学習したい」	日本人学生	肯定	17,239	6,082	1,961	234	263	25,779
			17.86%	6.30%	2.03%	0.24%	0.27%	26.71%
		弱い肯定	2,684	16,434	8,463	822	286	28,689
			2.78%	17.03%	8.77%	0.85%	0.30%	29.73%
		中立	905	5,989	20,972	1,665	556	30,087
			0.94%	6.21%	21.73%	1.73%	0.58%	31.18%
	弱い否定	123	681	2,759	1,872	543	5,978	
		0.13%	0.71%	2.86%	1.94%	0.56%	6.19%	
	否定	226	255	1,072	992	3,429	5,974	
		0.23%	0.26%	1.11%	1.03%	3.55%	6.19%	
	計	21,177	29,441	35,227	5,585	5,077	96,507	
		21.94%	30.51%	36.50%	5.79%	5.26%	100.00%	

表9より、日本人学生の「Q2.受講して授業の目標を達成した」×「Q3.授業に興味を持ち学習したい」の肯定-肯定をみると43.98%，否定-否定は、7.08%であり、中立-中立は21.73%である。このことから、72.79%の学生は、授業内容の関心度が授業目標の達成感へつながっていくことが確かめられた。

表10：Q 2 × Q 4 クロス集計（2008秋，2009春，2009秋，2010春）

		「Q2.受講して授業の目標を達成した」						
		肯定	弱い肯定	中立	弱い否定	否定	総計	
「Q4.この授業を受講して満足した」	日本人学生	肯定	18,308	9,011	3,333	311	300	31,263
			18.94%	9.32%	3.45%	0.32%	0.31%	32.35%
		弱い肯定	2,108	16,300	10,243	929	290	29,870
			2.18%	16.87%	10.60%	0.96%	0.30%	30.91%
		中立	535	3,474	18,530	1,764	728	25,031
			0.55%	3.59%	19.17%	1.83%	0.75%	25.90%
		弱い否定	83	519	2,309	1,720	576	5,207
			0.09%	0.54%	2.39%	1.78%	0.60%	5.39%
		否定	149	153	890	870	3,206	5,268
			0.15%	0.16%	0.92%	0.90%	3.32%	5.45%
		計	21,183	29,457	35,305	5,594	5,100	96,639
			21.92%	30.48%	36.53%	5.79%	5.28%	100.00%

表10より，日本人学生の「Q2.受講して授業の目標を達成した」×「Q4.この授業を受講して満足した」の肯定－肯定をみると47.32%，否定－否定は，6.59%であり，中立－中立は19.17%である。このことから，73.08%の学生は，授業の満足度が授業目標の達成感へつながっていくことが確かめられた。

### 3. 2. 2. Q17.履修理由についての集計結果

「Q1.シラバスを読み目標がわかった」と「Q17.受講理由」のクロス集計結果を表11に示す。

表11：Q1×Q17クロス集計（2008秋，2009春，2009秋，2010春）

		「Q1.シラバスを読み目標がわかった」					総計
		肯定	弱い肯定	中立	弱い否定	否定	
日本人学生	友達が履修するから	4,065	4,042	4,630	609	805	14,151
		57.29%		32.72%	9.99%		100.00%
	単位が取り易いから	1,405	1,884	2,495	375	526	6,685
		49.20%		37.32%	13.48%		100.00%
	シラバスを読み興味がわいたから	5,257	5,263	2,865	337	289	14,011
		75.08%		20.45%	4.47%		100.00%
	この分野に興味があったから	12,268	12,394	9,351	873	676	35,562
		69.35%		26.29%	4.36%		100.00%
	資格取得のため	7,496	7,390	6,207	557	582	22,232
		66.96%		27.92%	5.12%		100.00%
	必修科目だから	11,016	10,246	11,409	1,250	1,647	35,568
		59.78%		32.08%	8.14%		100.00%
	計	28,682	30,333	30,583	3,418	3,965	96,981
		60.85%		31.54%	7.61%		100.00%

表11より，Q1への肯定的評価につながるのは，「シラバスを読み興味がわいたから」75.08%，「この分野に興味があったから」69.35%，「資格取得のため」66.96%であった。一方，Q1への否定的評価につながるのは，「単位がとりやすいから」13.48%，「友達が履修するから」9.99%，「必修科目だから」8.14%となった。このことは，興味や関心などからくる強い動機付けは，目標理解につながり，他律的な弱い動機付けは，逆に目標理解を妨げる可能性を示していると考えられる。

### 3. 2. 3. Q17.履修理由にと4項目（Q1，Q2，Q3，Q4）のまとめ 表8，表9，表10および表11を図1の関連図にまとめた。

・ 4期合計 日本人学生(96,808サンプル)

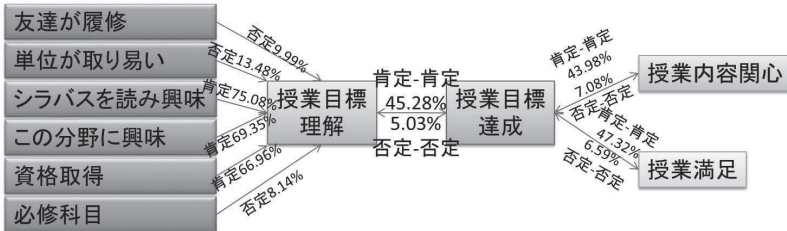


図1：Q17履修理由と4項目（Q1，Q2，Q3，Q4）の関連図

図1は、履修に対する興味や関心からくる強い動機付けが授業の目標理解を促進し、そのことが授業目標達成へとつながる。最終的に授業に満足感を覚え、発展的学習へ繋がることを示唆している。一方、他律的な弱い動機付けは、この正の関連を負に転化することを示唆している。

以上のことから、授業の満足度の向上や発展的学習につなげるためには、履修動機が重要であることが示唆された。学生が履修計画を際、その判断となるに十分な内容のシラバスと履修ガイダンスの重要であるといえる。現在、本学では履修登録が自宅で可能であり、2年生以上の学生は、学部学科により程度の差はあるが、履修ガイダンスの出席が必須ではない学科もある。科目履修に対する教員からの十分な説明の機会と時間を取るべきである。

### 3. 2. 4. Q5～Q16の因子分析

次に2008秋、2009春、2009秋、2010春のQ3～Q16のデータを用いて因子分析を行った。なお、因子の抽出は主成分法で行い、Varimax回転後、因子の解釈を行った。因子分析結果を表12に示す。

表12：Q 5～Q16因子分析結果（2008秋，2009春，2009秋，2010春）

	第1因子 教授方法の 肯定的評価	第2因子 自発的学習態度	第3因子 授業マネジメント の否定的評価
Q 6.教員の説明の解り易さ	.866	-.038	.011
Q 5.教員の話し方	.859	-.031	-.022
Q11.分量の適切さ	.847	-.035	.029
Q9.理解度の確認	.823	-.092	.042
Q12.設備の適切さ	.760	.039	-.022
Q10.授業時間の不適切さ	-.458	-.021	.373
Q16.自発的学習頻度	-.078	.875	-.002
Q14.予習回数	-.060	.866	.013
Q15.授業外質問回数	-.014	.805	-.077
Q 7.私語・携帯電話	-.023	-.043	.904
Q 8.遅刻・途中退席	-.028	-.052	.904
Q13.欠席回数	.121	.133	.148
寄与率	30.780(%)	18.326(%)	15.033(%)
累積寄与率	30.780(%)	49.106(%)	64.139(%)

因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

第1因子は、「Q 6.教員の説明の解り易さ」、「Q 5.教員の話し方」、「Q11.分量の適切さ」、「Q 9.理解度の確認」、「Q12.設備の適切さ」が正の負荷量、「Q10.授業時間」に関しては負の負荷量となったので、「Q10.授業時間の不適切さ」とした。よってこの因子を「教授方法の肯定的評価」とし、寄与率は30.780%であった。この因子得点の正の値が大きいほど教授方法の肯定的評価を示している。第2因子は、「Q16.自発的学習頻度」、「Q14.予習回数」「Q15.授業外質問回数」が抽出された。よってこの因子を「自発的学習態度」と解釈した。寄与率は、18.326%であった。この因子得点の正の値が大きいほど自発的学習態度が高くなることを示している。第3因子は、「Q 7.私語－携帯電話」、「Q 8.遅刻－中途退席」「Q13.欠席回数」が抽出された。よってこの因子を「授業マネジメントの否定的評価」

と解釈した。寄与率は、15.033%であった。この因子得点の正の値が大きいほど授業マネジメントの否定的評価が高くなることを示している。3因子の累積寄与率は、64.139%であった。

### 3. 2. 5. Q5～Q16の因子分析結果とQ1

因子分析結果の第1因子「教授方法の肯定的評価」の因子得点を「Q1. 授業目標の理解」別に平均値を求めた。グラフを図2に示す。

図2より、授業目標の理解と授業方法の肯定的評価が、関連していることが示唆された。このことは、①教授方法により授業目標の理解が変容できる可能性がある。または、②授業目標の理解こそが教授方法の肯定的評価につながることを示している。時系列的な経緯を考慮すると、②が支持される可能性が高いと推察される。

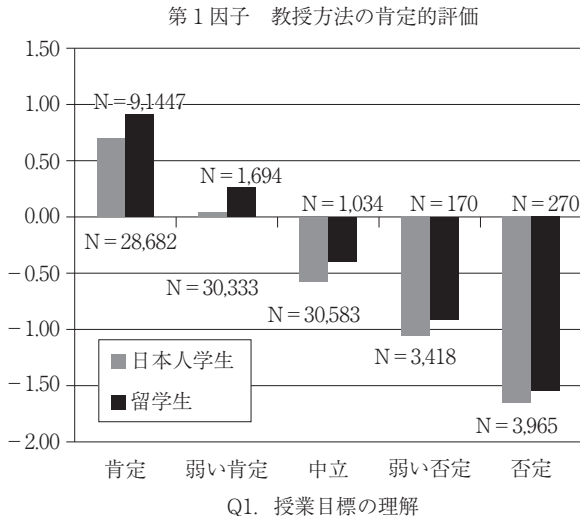


図2：第1因子「教授方法の肯定的評価」因子得点（「Q1. 授業目標の理解」別）



## 4. まとめ

本報告では、2008秋、2009春、2009秋、2010春の4学期を中心に「授業アンケート」の解析を行った。結果として、学生の授業目標の理解が、達成感や授業満足さらには発展的学習につながることを示唆された。

また、因子分析の結果からも授業目標の理解が教授方法の肯定的評価と関連することが示された。これらいわゆる履修のミスマッチが、学生の履修放棄につながってしまうと考えられる。

授業アンケートからみえた本学の課題は、シラバスの充実、よりわかりやすい4年間の履修モデルの視覚化、履修ガイダンスの必修化、学生ひとり一人にあった履修計画のアドバイスやコーチングなど、学生に強い履修動機・学習動機を啓蒙する施策の実施があげられる。

### 参考文献

- 文部科学省、「平成20年度 文部科学白書」、2008年  
中央教育審議会 大学分科会 制度・教育部会、「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」、2008年4月10日  
中央教育審議会 大学分科会、「中央教育審議会大学分科会のこれまでの主な論点について」、2011年8月24日  
2007年度 流通経済大学FD委員会、「2007年度 授業アンケート報告書」、2008年  
2010年度 流通経済大学FD委員会、「2010年度 授業アンケート報告」、2011年3月  
2011年度 流通経済大学FD委員会、「2011年度 授業アンケート報告」、2012年3月  
2012年度 流通経済大学FD委員会、「2012年度 授業アンケート報告」、2013年3月  
2013年度 流通経済大学FD委員会、「2013年度 授業アンケート報告」、2014年3月  
関 宏幸、「2014年度 授業アンケート報告」、2015年3月